

創世記 1 章 27 節、コロサイの信徒への手紙 1 章 13～20 節 「仕えてくださる神」

2025 年 8 月 17 日(主の日)

北川理恵教師（青山学院高等部宗教主任）

●もし自分が神様なら

私が勤めている青山学院高等部では、毎年夏休みに、「グリーンキャンプ」という 2 泊 3 日の宿泊行事を行います。20 名程度の参加希望者を募り、緑豊かな宿泊施設で、様々なアクティビティを行いながら、聖書の言葉を紐解いていきます。

今年は「私たちの造り主である神」をテーマとしました。クリスチャンの教員数名が、テーマに沿ってそれぞれに話をします。その中の一人の先生が、創世記 1 章の天地創造にちなんで、こんなお題を出しました。「もし自分が神だったら、7 日間でどんな風に世界を創造するか」。

それをグループに分かれて話し合うというのです。

皆さんは、もし自分が神だったら、7 日間でどんな風に世界を創造するでしょうか。

私の場合は、創世記 1 章に記されている、神様の御業が一番良いと思っているので、神様が造られた以上に良いものを造ることはできないと思い、正直何も思い浮かばないです。こんな難しいテーマで皆話し合えるのだろうかと心配しました。

ところが、私の予想に反して、生徒たちは楽しそうに、様々なアイデアを出し始めたのです。

私が見ていたグループでは、真っ先にこのような声が出ました。

「動物を造ったら、争いごとを始めるから、動物はいらないよね。」

「うんうん」と他の子たちも賛同しながら、動物たちのいない世界のプランがどんどん出来上がっていきました。まず 1 日目は、「やっぱり話し相手が欲しいから、神様をもう一体造ろう！」

それを聞いた私は思わず、「造られた時点でそれは“被造物”だから、もはや神ではない！」と真面目に突っ込みを入れてしまったのですが、何を言ってんだ、という顔をされてスルー。

2 日目以降は、一気に光、闇、陸、海、空を造ったり、食べ物がほしいけど、動物は造らないと決めたから、最初からお肉の状態で造ったり、きれいな景色がほしいから、枯れることのない、ずっと美しいままの植物を造ったり、何か娯楽がほしいから、娯楽グッズを造ったり、そして次の日は休憩して、娯楽グッズで遊んだり…、生徒たちの自由奔放な発想が、少しうらやましくもありました。こうして 7 日間が完成しました。

出来上がったプランのタイトルは、「神の過ごしやすい世界～自分だけのハッピーライフ」。見事なほどに、人間的な発想のプランが完成しました。

このグループワークをやってみて私がしみじみと気づかされたのは、聖書の神は、ただ自分にとって都合の良い世界を造ろうとされたのではない、ということです。自分だけが楽しむ目的であれば、まさに生徒たちが考え出したプランの通りになることでしょう。

しかし、神は、生き物を造り、人間を造り、彼らに意志を与え、自分の行動を選択する力を与えました。

造り主に逆らうリスクがあることを承知の上で。そうして、造り主の意図に逆らってしまう世界を、見捨てることなく、ずっと導いて来られたと、聖書は証言しています。

●キリストを通して世界を見る

先ほどの天地創造のグループワークで、

「動物を造ったら、争いごとを始めるから、動物はいらない」と言った生徒の言葉も印象に残りました。

ああ、そういう風に世界を見ているのだな、と。

確かに、人間は争いを繰り返しています。世界に目を向けると、国同士が戦争を繰り返し、身近なところに目を向けると、妬みや、恐れや、自己保身によって、様々な争いが起こります。

私も高校生の頃に同じように思っていたことを思い出しました。

いっそ人間がすべて滅びれば、世界は平和になるのではないか。環境が汚染されることもなく、地球が美しい姿を保っていけるのではないか。そのように、造り主を見失うことは、自分自身の存在をも否定していくことにつながるのでしょうか。そして、争いを繰り返す人間の姿を見つめながら、「人間の本質とは、争うことだ」という考えすら出て来ます。

そのような私たちに、そうじゃないよと、聖書は語りかけてきます。

創世記1章では、神がお造りになったすべてのものは極めて良かった、と語られています。人間は、神にかたどって造られた、特別な存在なんだよと。

ところが、神から離れて、神を見失った人間は、自分たちの姿から神の姿をイメージする、という逆転現象に陥りました。特別な存在として造られたことを、感謝ではなく、誤った優越感によって受け止め、まるで、人間が神の主人かのように、はき違えるようになってしまいました。

だからこそ、今朝の、コロサイの信徒への手紙はこのように語っています。

1章15節以下で、「御子は、見えない神の姿であり、すべてのものが造られる前に生まれた方です。天にあるものも地にあるものも、見えるものも見えないものも、王座も主権も、支配も権威も、万物は御子において造られたからです。つまり、万物は御子によって、御子のために造られました。」(15～16節)

ここで何度も繰り返されている「御子」とは、神の独り子イエス・キリストのことなので、こう言い換えることができます。

「神の子イエス・キリストは、私たちの目には見えない、神の姿を示す方であり、また、天地万物は、キリストにおいて造られ、キリストによって、キリストのために造られました。つまり、イエス・キリストとの深い関係によって造られ、存在し、導かれているのです。」

15 節の「万物は御子において」つまり、「キリストにおいて」とは、英語で「in Christ」。「キリストの内に」とも言えます。クリスチャン同士の手紙やメールの最後に、「キリストにあって」とか「主にありて」という締めくくりの言葉を書くことがありますが、まさにその言葉です。

そして、その続きの「御子によって」「キリストによって」とは、「キリストを通して」とも訳せる言葉なので、万物は最初にキリストを通して、キリストを根拠にして造られたのだということです。

さらに、「御子のために」「キリストのために」とは、造られた目的、方向性がきちんとあるということを意味します。

「ために」という言葉は、「向かって」と言い直した方が、イメージがしやすいのではないかと私は思っています。

例えば、「このプレゼントはあなたのために用意したよ」と言う時に、このプレゼントはあなたへと向かうものだ、というプレゼントの方向性が示されています。

つまり、この世界は、イエス・キリストへと向かっていくように造られた。

きちんと方向性が示されているのだ、ということです。

それでは、「イエス・キリスト」とはいったい誰でしょうか。

それは、神の愛を示された方であり、神の平和をもたらす方であると聖書は証言します。そうであれば、すべてのものは、神の愛と平和に包まれて存在している、つまり、神の愛と平和を通して造られ、神の愛と平和に向かって造られている存在だ、それがこの世界の本来の姿だ、と聖書は告げています。争いを通して、争いのために、存在しているわけではない。

人間、そして世界が本来そのようなものであれば、私たちは、神について、世界について、人間について、自分について知りたいときに、イエス・キリストを見つめる必要があります。

世界は、そして、あなた自身も、イエス・キリストと切っても切り離せない関係にあるのだよ、とコロサイの信徒への手紙は教えてくれています。

●手紙の宛先の人々

このコロサイの信徒への手紙は、誕生して間もない教会の人々に語られたようです。

福音を聞いてよちよち歩きを始めた人たち。

今日読んでいただいた箇所少し前の 9 節に「こういうわけで」とありますが、その前の部分には、手紙の差出人であるパウロの仲間、エパfrasが、コロサイの町の人々に喜び

の知らせを語り、その希望に生き始めた人々が、信仰と愛の実を結んでいる様子を聞いたと書かれています。そのように、希望によって生き始めたあなたがたのために絶えず祈っています。ますます深く神様を知るようにと願っています。そのように告げた後に、この手紙は 15 節から 20 節までの万物の創造について語り始めます。

見えるものも見えないものも、キリストにおいて、そして、神の良い計画に向かって造られたと。

それは、視野が狭くなってしまう私たちに、広い視野を与えるためではないかと思います。

私は宇宙の話を聞くのが大好きで、この世界の生命は、偶然では決してありえないような、奇跡的な確率で誕生したのだと聞かたびに、すごいなあと思います。

自然を研究する人々から、この世界には設計者が存在しているとしか思えないほど、すばらしく調和しているという話をよく耳にします。

最近聞いた話では、マツボックリの話がとても印象的でした。

マツボックリは、地面に落ちてから何年も固く傘を閉じているそうですね。

そして、落雷などによって山火事が起こると、その高温に反応して傘を開いて発芽できる状態になるそうです。その結果、まるで焼き畑のようになった栄養豊富な土壌に、種が落ち、芽を出し、成長し、そして森が新しく再生するというのです。「山火事」だけを取ると、ただ悲惨な災害のように思えますが、大きな視点で見えてみると、それは、命を新しく生み出す一つのステップなのだと気づかされます。

見える部分だけでも、その壮大さと緻密さに驚かざるを得ないので、さらに見えない部分まで、壮大で緻密な計画があると知らされた時、どれだけ自分の視野が狭く、小さな世界で物事を判断しようとしていたかと気づかされるのではないのでしょうか。

この手紙の 11 節では、「どんなことにも根気強く耐え忍ぶように」と言われています。

おそらくこの手紙を受け取った人々も、様々な困難に見舞われることがあったことと思います。

私たちと同じように、戦争や、いさかいや、暴力的な事件のたびに、どうしてこんなことが、と落胆せざるを得ないこともあったでしょう。

そのただ中で、神の天地創造の御業に目を向けるようにと、聖書は促します。

私たちは、何のために存在し、どのような計画の中で生きているのか。

その広い視点から、自分自身を見つめるようにと促します。

●失敗作ではなく

神様は、この世界を良いものとして造られました。

そんな風に良いものとして造られたのなら、なぜ人間は互いに争い合うのか。

戦争なんてしないように、もっと完璧に造ってくればよかったのに。

常に正しい判断ができるように、造ってくれたらよかったのに。

そのような疑問の声を聞くこともあります。

特に私は、創世記 3 章で、人間が神に逆らって自己中心に陥ってしまったところを生徒と

一緒に学ぶ際に、そのような疑問の声を聞くことが多いです。
どうして神様は人間が常に神を愛し、常に互いに愛しあうように造らなかったのか。

同僚のクリスチャンの先生が、神様を信じる前に、同じような疑問を牧師に投げかけたところ、こんなやり取りをしたことを教えてくれました。

「もし君に子どもがいるとしよう。そして、もし君に、自分の子どもの意志をコントロールする力があったとしよう。君は、子どもの意志をコントロールして愛されるか、それとも、子どもが自分から愛してくれるか、どちらの方が嬉しい？」

「うーん、それはやっぱり、子どもが自分から愛してくれる方が嬉しいかな」

「神と人間の関係も同じだよ」

確かに、意志をコントロールして思う通りにするなら、それはもはや「愛する」という行為ではなくなってしまうでしょう。神は、私たちに意思を与え、行動を選択する力を与えました。

造り主に逆らうリスクを覚悟してまで。

それは、私たちを完璧に造らなかったわけでも、失敗したわけでもなく、神の愛の行為です。

その上で、神から離れ、争いの中を生きる私たちの問題を、自らの問題として引き受けてくださいました。19節以下にこうあります。

「神は、御心のままに、満ちあふれるものを余すところなく御子の内に宿らせ、その十字架の血によって平和を打ち立て、地にあるものであれ、天にあるものであれ、万物をただ御子によって、御自分と和解させられました。」

私たちが造り主に背いて生きてしまうという罪の問題を、キリストが代わりに背負って十字架にかかってくださいました。そして、復活のキリストと共に、新しい命に生きるものとしてくださいました。

このキリストこそが、「教会の頭」だと18節で言われています。

教会は、キリストにおいて生き、キリストに向かう共同体です。

そして、神を讃える、この礼拝の場で、平和の芽が出ている、と私は思うのです。

礼拝は、造り主をほめたたえること。その姿は神が最初にお造りになった喜びに満ちた世界の姿です。

私自身のことを振り返ってみても、神様って本当にすごいね！と周りの人たちと言っている時が、

本当に幸せで、喜びに満たされます。

そのように、造り主をほめたたえることは、造られた自分自身の存在を、そして、周りの世界をも喜ぶことにつながるのではないかと思います。

たとえ、この世界に争いがあっても、それでも神様が愛しておられる世界です。

イエス・キリストが犠牲になってまで、救い出そうとしておられる世界です。

神様が諦めないから、私も諦めない。そのようにして、礼拝のたびに御言葉をいただいて、

平和の計画に向かって歩み続けるのが、私たちの姿だと思うのです。

●和解は神様からのプレゼント

今年は戦後 80 年であることを覚え、私たちの学校では 5 月に「平和、和解」をテーマにして、3 人のゲストをお招きし、特別礼拝を行いました。その中のお一人で、英国国教会司祭のウィリアムズ郁子先生が、「和解は神様からのプレゼント」とおっしゃっていた言葉が強く印象に残りました。

ウィリアムズ郁子先生は、今から約 40 年前に、夫のマークさんの仕事の関係で、イギリスに渡りました。そして、先の戦争で、日本軍がイギリス人の捕虜に対して行ったひどい仕打ちを知り、イギリス人の日本に対する憎しみや敵意を痛感することになりました。彼女自身が行った行為ではないですし、当時の戦争に加担したわけでもありません。でも、彼女は同じ日本人として、この憎しみと敵意を見過ごすことができませんでした。どうしたら「和解」できるのだろうか、と悩みながら恩師に相談しました。すると、自らが出会う人一人一人に、フェイストウフェイスで、誠実に向き合っていくことが大切だ、と教えられたそうです。深く傷ついている人に、相手を赦すことを押し付けるわけにはいかないけれど、誠実に、諦めずに関わり続けて行った先に、思いがけないプレゼントとして、和解が与えられる。実際に、郁子先生がこの問題にぶちあたってから二十年後に、イギリス人と日本人との和解の礼拝が実現したそうです。

礼拝で罪を告白し、お互いに赦しの言葉を語り合う。

憎しみを抱いていた人も、相手をゆるすことでようやく心が解放されました。

そのようにして実現した「和解」は後の時代の人に、「憎しみ」ではなく、「親しみ」を手渡していきます。

大きなところに目を向けると、戦争は無くならず、争い続けている、人間の愚かな歴史しか見えないかもしれません。けれど、その歴史の中に、キリストと共に、小さな平和の種をまく一人一人が確かにいます。

私たちは「神様の平和の計画に向かって造られた。そして、平和の計画に向かって生かされている。」

そのことを知らせるために、神は私たちをこの礼拝に招いてくださいます。

私たちが、キリストにあって、キリストを通して、キリストに向かって創造された自分を見つめ直し、神の平和の計画に向かって歩き続けるためです。

～祈り～

御子イエス・キリストによって平和を打ち立ててくださる父なる神様

あなたは御言葉と聖霊によって私どもを満たし、あなたの良いご計画へと私どもの目を開いてくださいます。憎しみと争いがこの世界を支配しているように見えたとしても、慈しみに満ちたあなたが、恵みによってご支配されていることを思い出させてください。あなたがわが子として慈しんでくださる一人一人を顧み、この一週間の歩みをお支えください。主イエス・キリストの御名によってお祈りいたします。アーメン。